

三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まる。

三歳までに人としての心を育てる。

六歳でしつけ、振る舞いを身につけ

九歳で一人前の言葉遣いを覚える。

十二歳できちつとした文章を書き

十五歳で物の道理・真理を理解する。

江戸寺子屋の子育て論である。

もちろん、江戸しぐさは

子育て論だけではない。

江戸商人のリーダーたちが築き上げた

上に立つ者の行動哲学である。

よき商人として生きる商人道であり

人間関係を円滑にする知恵でもあった。

また、平和で安心な社会を支えた

江戸っ子の共生の知恵でもあるのだ。

江戸しぐさの語り部として

語り続けてこられた越川禮子さんに

現代に生かす江戸しぐさの心を

子どもを中心にお聞きしました。

亭主・吉田正裕

宮島弥山 大本山 大聖院 座主

第5回 客人・越川禮子

〔プロフィール〕

1926年生まれ。東京都出身。

青山学院女子専門部家政科卒業。

1966年インテリジェンス・サービス設立。

1986年『グレイバンサー』で「潮賞

ノンフィクション部門」優秀賞受賞。

以後、共生をテーマに取材、研究、執筆を

行なっている。「江戸しぐさ語りべの会」を主宰。

NPO法人江戸しぐさ理事長。

著書に「江戸の繁盛しぐさ」「子供が育つ江戸

しぐさ」など多数ある。

十歳までに生きる力を備えた上で 知性を育てるのが理想です。

「互角で向き合える」

「互角で言い合える」

「互角で付き合える」(つじじゅ)。

吉田 江戸時代の寺子屋と繋がり深い、江戸しぐさのお話を伺いたいと思います。本日は宜しくお願いたします。

越川 私が紹介している寺子屋は、江戸寺子屋といって、江戸商人などのもので、教育、男主、女主の卵を育てる教育を行っていたものです。商売繁盛や街の繁栄、平和をいかに作っていくかを、古典などからも学び、江戸しぐさというルールを作っていくわけです。江戸しぐさは感性であり、生きる力です。人間の心を自覚させ生きる力を備える時が三才頃で、それから六つ躰九つ言葉、と段階的に知性を育てるのが理想です。当時は、何かを教えるというよりも、愛情をたっぷり注がれた子どもが、親や周りの大人を見ながら生きる力を身に付けたんです。ただ、江戸寺子屋の場合は、人の上に立つ人を養成するところですから、読み書きそろばんだけでなく、見る聞く話す考えるまでを教育するところが、普通の寺子屋とは違ったんです。

吉田 江戸しぐさについて、少しお話をさせていただきますか。

越川 江戸しぐさって言うのは、いわゆる上に立つ人のしぐさなんです。影響する人が一人でも二人でも、一人でもいる立場にある人の心構えなんです。詳しくは、江戸の歴史にも深く関わるんです。江戸に幕府が開かれてから百年も経たないうちに江戸は大都市になるんです。大体100万人くらいの人口になったときに、侍方が86%位の土地に住みほぼ半分人口の町方は20%以下の面積の土地にひしめくように住んでいました。南は九州、北は東北まで色々な人が集まって江戸の下町は異文化のつぼだったんですね。そうすると当然トラブルが起こります。トラブルを防ぎ、商売を繁盛させながら平和な街づくりをするには如何にしたらいいか。当時の町方のリーダー、今で言うならば経団連のメンバーのような方たちがルールを作っていくわけです。それを町衆が真似を始め、ついには長屋のはっさんくまさんまでやるようになってきます。本来は、上に立つ町衆の深謀遠慮なんです。江戸の末期には江戸っ子の癖だといわれるほどになってしまった。江戸しぐさの江戸っ子とは、江戸しぐさをする人だし、紳士の中の紳士なんです。「目の前の人を仏の化身と考える」、「時泥棒をしない」、「肩書きを気にしない」、「遊び心がある」、「世辞が言える」というような条件がありました。世辞というのは、お世辞ではなく、大人の言葉のことなんです。

「時泥棒をしない」というのは、商人の上に立つ人の威光です。知恵でもなく礼儀作法でもないけれど全部を包含したものが江戸しぐさです。いうならば江戸しぐさは感性であり、生きる力です。

吉田 三つ子の魂、百までと言つ言葉もあるくらいですからね。

越川 生きる力を備える3歳頃に虐待をされたりすると、大変な事になります。10歳までには生きる力を備えた上で、知性を育てるのが理想です。現代の教育は、もっと人間として大事なものを育てていく教育にしなければいけないのではないかと思います。

吉田 江戸しぐさの語り部になろうと思われたのは何故なんでしょうか。

越川 日本が高齢化に入ったのは万博の頃なんですね。あの頃はまだ老人問題なんか誰も見向きもしなかったんです。でもこれから絶対その高齢化社会になると、でもこのころ、誰もそんなことを思っていなかったんです。そこで、高齢化社会のモデルみたいなものはないかと、アメリカに行つてグレイパンサーズというグループで色々取材をしているとき、新聞を見たら、新聞のコラムに江戸しぐさの紹介があったんです。日本にこんな良いものがあるじゃないのと思つて。ようするに共生なんですよ。価値感の違う人たちが一緒に努力してやっっていく。アメリカの場合は老若男女、日本の場合はまだ傘傾げとか往来しぐさが書いてあったんですけど、その一番元になるのは思いやりですね。思いやりで全然違うジャンルの人たちが一緒に共生するということだから、これは同じようなことだと思つた訳ですね。江戸には、共生と言つ言葉はなかったんですが考え方はある訳です。「互角で向き合える、互角で言い合える、互角で付き合える」ってこと。決してもたれ掛らない自立した者同士が思いやりで共生するということだから。グレイパンサーの老人と若者が共同してやっていることをすごく身近に感じちゃった。日本に共生のモデルがあるじゃないのと思つて。そうしたら、フランス系の新聞記者の女の人に来て、「あなたはグレイパンサーという非常に現代的な取り組みを取材していたのに、何で古めかしい江戸なんですか」って聞いたんです。「古めかしい江戸」なんです。一般的には。でもそうじゃなくて、江戸は「つう」って考え方をしていると説明をすると、びっくりしてわかりました。おっしゃってましたけれどね。考え方が進んでいたんです。江戸は。その後、先生方に会つて色々話をきくと目から鱗でした。江戸ってのは素晴らしい。町方の人間が生き活きとして人生を楽しんでいるじゃないかと。そしてちゃんとボランティアもしながら、素晴らしい生き方をしていると思つたんです。

相手に喜んでもらう快感を
体感させるのが
小売とサービス業の醍醐味。

吉田 今、宮島では寺子屋をモデルに「宮島でらこや」を大学生が中心になって活動しているのですが、今、大学生達は自分で考えることがなかなかできないんですね。それは

今までの教育がそういう教育をしてきていないからだと思っんですけれども、そういう意味でも江戸寺子屋ではどのようにリーダーを育てていたのでしょうか。

越川 先ほども少し紹介したように、見る聞く話す考えるまでの教育を、三歳ぐらいから段階的に行なってきたわけですが、江戸の町衆の子弟は、自分の頭で考えて自分の言葉で自分の意見を言う。そういう訓練をされてたんです。今は、インプットした他人の意見をそのまま正しく伝える方が点数がいいじゃないですか。

吉田 そうですね。暗記力の良い人が成績優秀と言うことですよ。

越川 だから、犬飼みちこや白州次郎と同じ事を言っているんですね。留学中の犬養みちこがフランス語の授業で答案を出したら0点になっちゃった。すごい不満だね。先生が言った通りに答えたのについて、教授のところは抗議に行くんですね。白州次郎も自信のあったテストがものすごく点数が低かったんです。そして二人とも同じように先生のところは抗議に行くんですけども、教授の行った言葉も同じなんですよ。「それはぼくの考えだ」って。「私の書いた本を読んで、君がどのように考えたかが一つもないじゃないか」って。でも私達はそういう教育をされてきた。だから女学校なんかでも、先生の言ったとおり、本に書いてあるとおり答えたほうが成績は良いわけですよ。それで馴らされちゃったから、考える習慣がないんですよ。インプットしてアウトプットするだけなんですよ。

吉田 そういう意味でも、今の時代、江戸しぐさをどんどん広めていく価値があると思っんですけれども、この江戸しぐさを、どう活かして行くかと言うか、どう残していけばいいのでしょうか。

越川 やっぱ子どもですよ。子どもへのアプローチ。いろいろな話をして最後の20分くらいで傘傾げなんかの実技をさせるんです。そんなことないんですね今の授業に。一年生なんか大きな傘に隠れちゃったりして傘傾げをやったりして、それを見て大人たちがただ楽しがっているところから一体感が出ていいと思っし、先生方が悪い見本になると、生徒達は大喜びなのね。電車の中で踏ん張ってのつるところとか、江戸しぐさのない電車の中なんて、悪い人になるのが先生だと皆大喜びなの。そういうきつかけとしてはすごくいいし、正確に見てますね子どもは。たまに頓珍漢な子もいますよもちろんね。だけどちゃんと理解している。これを今日からでも今からでも実行したら、「この国は美しい国になるんだって言っ子もいますよ。そういうツールとしては江戸しぐさは恰好のものですな。こないだタクシーの運転手さんから聞いたんですけれど、小さな子どもが飛び出してきて、運転手が急ブレーキをかけて助かったら、子どもは「おじちゃんごめんさい」って泣いて謝ったって言っのね。怪我がなくてよかったと思っっていたら、お母さんが出てきてね、「何やってるのそんな知らない人に謝って」って子どもを怒鳴りつけたんです。だから、運転手さんは「あんたより子どもの方がよっぽど立派だ」って喧嘩になったって話をしていましたね。

吉田 最近「モンスターペアレント」ってテレビドラマにもなっていますよね。

越川 まさにそうですね。「謝ったら損だ」って、何か変な考え方が入っている。そこらへ

んをひっくり返していくにも子どもがキーポイントなんですよ。

吉田

宮島てらこやでも、子ども達が気づく段階でそれを世話する大学生も変わってきているんですね。また、それを見る大人たちが又そこで気づいて変わってきています。実際は親から変わればいいんですけど、親はなかなか変わりにくいんですけども、親が変わって行く中で少しずつ大人も変わってくると思いますよ。

最後に、私たち宮島てらこやなど色々な活動していますが、今からの私たちにアドバイスを頂けたらと思います。

越川

もう、江戸しぐさ全部がアドバイスなんです。日本人が親切でなくなっちゃったのはどうしてなんですかね。中学3年生のときの日記が出てきたんです。その中に在る日の出来事が描写してあった。おじいさんが坂の上に向かって荷車を引いて上がるうとして、重いから、ずず、ずず、と後ろに下がっていきんです。危ないと思ったけど私は女学生だし、たかが知れてるからどうしようもない。そう思っているうちに案の定荷車は側溝におっこっちゃったんです。そばを通った男の人が手伝って押すけど、どつしてもだめだったんです。そしたら、上の方から鉢巻した屈強な若者が降りてきて、オレが押してやるって言ったら、そこからへんを通っていたおばちゃんとか、8人がよってきて、みんなで押したら上がったんです。その最後に私の感想が「ああ日本人は美しい。ああ日本人は良い人だ」って書いてあってね。戦争中さえ、そうやって助け合ってたんですよ。そういう親切なしぐさをしなくなっちゃったのね。そういうことが当たり前のことがかっこいいんだよって見せるほかないんですよ。無条件に「ありがとう」って相手に喜んでもらう快感を体感させるってのは小さいときほどいいと思うの。だから、てらこやでそんな体感をさせてあげて欲しいですね。そういうことを教えてくれる人が今いませんから、心して子ども達と接していきたいと思えます。本日はありがとうございました。

吉田